
Scenery of Love

壇 敬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Scenery of Love

【Nコード】

N9385M

【作者名】

壇 敬

【あらすじ】

『恋愛の風景』をオムニバスで綴った作品。

五つの季節、五つのシチュエーション、五つの恋愛、五つの想い、五つの恋人達をお楽しみくださいませ。

五月の風の中で（前書き）

「五月の風の中で」は、新緑の、初夏というには早過ぎる高原の別荘の、大きな窓が開け放たれた部屋で、僕と彼女が初めてキスをした、そんな風景を描いてみました。

五月の風の中で

窓辺のレースのカーテンが揺れていた。

淡い光がその窓から差し込んでいた。

五月の新緑に反射した柔らかい光が、彼女の顔を眩しく照らしていた。

「ん、どうしたの？」

彼女は僕の顔を覗き込んで、僕がそのことに気付くと、彼女はそっと微笑んだ。

彼女の笑顔は眩し過ぎる。

レースのカーテンを揺らす温い風が、彼女のセミロングの髪を揺らしていた。

彼女の髪が揺れることに、シャンプーの香りが僕の所まで漂ってくる。

「うっん、何でもないよ」

僕は、彼女をじっと見つめて言った。

彼女は、僕の見つめることに頬を赤らめ、視線を外してティーカップに目を落とした。

そして、バラの花柄のカップを口に運んだ。

カップを持った両手の指は、透き通るように白くて、折れそうに細くて、両手でやっとカップを支えている、そんな感じに見えた。

紅茶を一口飲んだ彼女は、視線を窓の外へ向けた。

僕も彼女に合わせて窓の外を見た。

大きな大木の、生茂った枝葉越しに、太陽の光がまだらに見えた。彼女はそっとティーカップを置いて、その右手の僕の方へ差し出した。

「ねえ」

彼女は僕を呼んだ。

猫のような甘ったれた声で。

僕は窓の外から視線を彼女へ向けた。

そして、僕も左手を彼女に差し出した。

僕の手のひらに、彼女の指先が触れた。

彼女の指先は冷たかった。

「温かいわ」

彼女はそう言って僕の手を握った。

僕も彼女の手を握り返した。

僕が握ると彼女の指は、音を立てて折れそうな感じだった。

僕と彼女は、僕の左手と彼女の右手をしばらくの間、握り合っていた。

彼女はそつと目を閉じた。

そして、僕は彼女に近づいた。

僕の左手と彼女の右手は、よりシツカリと握り合った。

僕の右手は彼女の腰に巻き付き、そして彼女の左手は僕の肩に掛かった。

更に彼女の顔に近づいて、僕も目を閉じた。

僕の唇にとても柔らかい接触を感じた。

僕は更に彼女を近寄せ、彼女は僕に身体を預けた。

それは、ほんの一瞬だった。

そんな気がする。

だが、とても長い時間だった気がする。

唇から柔らかい感覚がなくなった時、僕と彼女はそつと目を開けた。

彼女の目は潤んでいた。

そして、頬を更に赤くして、僕から視線を外した。

僕はそんな彼女が愛しくて、もう一度彼女を引き寄せた。

僕と彼女の、初めてのキス。

それは、優しい五月の風の中の、ゆっくりとした時間の流れの中で、起こった出来事だった。

優しく、ゆっくりとした季節の中で。

五月の風の中で（後書き）

読後の感想がありましたら、是非。

雨（前書き）

「雨」は、梅雨の頃の少しアンニュイな学校帰り、ファミレスでの僕と彼女の「雨の鬱陶しさも少し楽しいかな？」っていう風景を描いてみました。

雨

相合傘でもいいのに、と僕は思った。
彼女もそう思った。

でも、なんとなく。

それぞれで傘を差しちゃったし。

肩が濡れるのも嫌だし。

そんな中途半端な理由で、僕らは別々の傘で歩いていた。
歩いていたら、いつものファミレスの前まで来た。

僕らは顔を見合わせてうなずいた。

僕は傘をすぼめた。

彼女も傘をすぼめた。

そして、ファミレスの自動ドアを開けた。

ファミレスの中はいつもと同じだった。

晴れていようが雨であろうが変わらない。

僕らは、禁煙席の角の二人席に座った。

濡れて滴が落ちる傘があることを除いてはいつもと同じだった。

「今日は寒いから、ホットチョコで」

「じゃあ、私も同じモノで」

しばらく待つとウェイトレスがホットチョコをサーヴした。

僕らはホットチョコのカップを抱えてその暖かさを味わった。

「あつたかい」

彼女はそう言ってホットチョコをすすった。

そして、ニコリと微笑んだ。

僕は彼女の笑顔を見ながら、ホットチョコをすすった。

「あのさ」

「うん」

そんな言葉から始まる僕らの会話。

最近は見詰め合うこともしばしば。

お互いにそのことに気付く。

そして、ちよつと照れる。

最後に、お互いに視線を外してしまう。

「雨、降ってるね」

「うん、降ってるね」

彼女が指差す窓の外を、僕は見た。

彼女の指が、窓のガラスを伝った。

彼女と居るのは楽しい。

彼女もそうだと思う。

これが『恋愛』かな？

こんなことが『恋』なのかな？

「ねえ」

「なに？」

そんなことをボーッと考えていた僕を、彼女は呼んだ。

僕がボケた反応をしたら、彼女はクスリと笑った。

それでも窓の外は、雨が降り続いていた。

雨（後書き）

お読みになった感想を、是非。

髪型、それも彼女の。（前書き）

「髪型、それも彼女の。」は、夏休み前に髪を切った彼女に対する僕の想いを、特に僕がボブカットが好みで、それを知っている彼女の不敵さを描いてみました。

髪型、それも彼女の。

ちょっと前までは前下がりのボブで、襟足が見えていたのに。今は、肩に届くセミロングなボブで、僕は戸惑ってしまう。

そう、それは彼女の髪型だ。

彼女の髪は量が多くけど、細くて柔らかい。

それに癖が全くないストレート。

そんな彼女のボブカットがたまらなく、僕をゾクゾクさせていた。彼女が首を傾げると、彼女の髪は重力に抗えずに、鉛直方向にその姿を変える。

アンバランスで不安定な感じ。

それが彼女の、オトリとした顔立ちに緊張感を与えてくれるのだ。

だが、その髪が伸びた。

長くなった髪は、重力に従わない。

彼女の肩が邪魔をして、物理法則通りに髪が動かないのだ。

でも、僕は悲しくなかった。

彼女はいろんな髪型を僕に提供してくれた。

まずは髪をまとめることだ。

後でまとめたり、ポニーテールにしたり。

前髪の端が頬にかかって、しかも汗で頬にピタリとくっついて。ちよつと艶つぽく見えた。

そして、アップにして大人の演出をする。

でもまだ、彼女には似合わない。

嫌いじゃないけどね。

時々、カールを掛けたりする。

ストレートヘアを見慣れた僕には凄く新鮮だ。

こんな彼女もいいな。

でも、そんな僕の思いなんか関係なしだ。

夏前になると、彼女は必ず前下がりのショートボブになる。

「暑いからよ。楽だし、軽いし」

そんな風に彼女は言うけれど、僕の好みを知ってるからな。

「この方がいいんでしょ？」

そう僕に振られると、僕は頷くしかない。

僕が大きく頷くと、彼女はその大きな瞳を細くしてニツコリと笑うのだった。

そして、彼女は僕の横へ座って、僕の肩にショートボブの頭を持たれ掛けてくるのだ。

彼女の髪からはいつも、ほんのりとローズの匂いを漂わせるのだった。

僕はそれでいつもノックダウン。

僕はつい、彼女を抱き寄せてキスをしてしまう。

僕はやられている。

やられっぱなしだ。

髪型に。

それも彼女の。

髪型、それも彼女の。（後書き）

是非、感想をお聞かせくださいませ。

高嶺の華（前書き）

「高嶺の華」は、夏休みに入ってすぐに、学校で人気のある亜也子と僕がまさかの初デート、うぶで戸惑いながらも手をつなぐ、海の風景を描いてみました。

高嶺の華

スカイブルーの空。

ターコイズブルーの海。

ライトグレーの砂浜。

僕と亜也子は、その砂浜に並んで座っていた。

MP3プレーヤーに分岐アダプタをつないで、二人で音楽を聴いていた。

僕の手の上に亜也子の手が重なった。

僕はドキッとして亜也子の方を見た。

亜也子は僕を見つめていた。

微妙な表情を僕に向けて。

ライトベージュのジャケット。

アクアブルーのスキップパーシャツ。

アイビーブルーのマーメイドスカート。

今日の亜也子のファッションはこうだった。

意外だった。

もっとフェミニンだろうと思っていた。

だが、それは僕の思い込みだったのだ。

染めていない漆黒でストレートな髪。

それを前下がりのショートボブにカット。

化粧つ気のない丸顔。

口は小さくて、鼻も小さくて。

目はクリッとして、ちょっと大きい。

スカートから伸びた足は、細くて折れそう。

撫で肩の、スレンダーなスタイル。

それが亜也子の容姿だ。

学校では、静かで目立たない女子だ。
無口で、喋っても口が開いたかどうか。
その瞳は、いつも無限遠を見つめている。
聞いていないようで、聴いている。

それが、亜也子の…。
何だろ。

性格とはちよつと違う。

亜也子の性格はよく解らない。

亜也子の表面に現れる事柄が少なくて。

そんな亜也子だけど、学年で人気がある。

いつもクラスには、男子が詰め掛けていた。

そう言う僕も、亜也子のファンだった。

ただし「熱烈」って訳ではなかったけれど。

やっぱり綺麗だから、彼女。

それに僕も普通の男子だし。

僕にとっては『高嶺の華』のようなものだった。

「所詮、僕がどうこう出来るモノじゃない」

そんな風に、どこか高を括っていたことは否定しない。

それがだ！

僕は今、亜也子と砂浜に並んで座っているのだ。
信じられるか？

それは、幼馴染の江都子が話を持ち掛けてきたのだ。
「ちよつと話があるんだけど、いい？」

そう話し掛けてきた江都子に、僕はいつもの調子で応えた。

「なに？」

江都子は単刀直入だった。

「亜也子がデートしたいって」

あまりの直球に、僕はすぐには理解できなかった。

「へ？」

江都子は、動きの鈍い僕の頭を殴った。

「バカ！」

あつという間に、江都子に約束させられた。

「いい？ 日曜日の八時三十分には駅のコンコースよ。分かった？」
迫る江都子に僕はタジタジだった。

僕と亜也子は、しばらく見つめ合っていた。

僕は動くことが出来なかったのだ。

やがて、亜也子が声を出した。

「好き？」

僕は頷いた。

すると、亜也子は微笑んで言った。

「嬉しい」

そして、僕の手を握ってきた。

僕は握られた手に視線を落とした。

僕は掌を返して亜也子の手を握った。

そのまま、ずっとそうしていた。

空がオレンジに。

海がチャコールに。

その時、僕らはようやく砂浜から立ち上がった。

僕は亜也子に訊いた。

「また、デートしてくれる？」

亜也子は僕の手を握ったままで、僕を見つめて頷いた。

僕と亜也子は、そのまま駅へと向った。

高嶺の華（後書き）

よろしければ、読後の感想などをよろしくお願いします。

シャンプー（前書き）

「シャンプー」は、暑い日々が峠を越えた頃に、彼女を抱き寄せた時に香る、ほのかなシャンプーの匂いが、男の心をくすぐる、そんな風景を描いてみました。

シャンプー

彼女の手をつなぐ。

僕は彼女の手が好きだ。

彼女はピアノを弾くから、指が細くて長い。

だけど、柔らかくて小さい彼女の手。

男のゴツゴツとした手と違う。

本質的に、男の手との違いに気付かされる。

彼女の手はホントに、小さくて可愛くて優しくて柔らかくて。

僕は思わず彼女の腰に手を回して、僕の身体に彼女の身体を引き寄せる。

なんて華奢な身体なんだ。

彼女のウエスト、何て細いんだ。

抱き寄せ過ぎると折れてしまいそうだ。

でも、シッカリとした存在感がある。

僕の腕の中で息づく彼女は、僕が彼女を抱き締めているはず。

なのに、彼女が僕を包み込んでいるような錯覚に陥る。

その時、彼女の頭が僕にしなだれてくる。

彼女のサラサラの髪が重みでパラリと垂れた。

彼女の髪が僕の頬に触れる。

彼女の髪の香りが漂う。

シャンプーの香り。

普段は感じない、彼女の匂い。

いい香り。

僕がまどろみかけた時、彼女は僕に声を掛けた。

「ねえ」

僕は喉を鳴らすように答えた。

「うん？」

彼女の表情は見えないが、彼女が微笑んだらうことは想像でき

た。

そんな言葉が彼女の口から聞こえた。

「なんか、心地いいわ」

『それは僕だつて同じさ』

そう言おうと思つたが、あえて口にしなかつた。

その代わり、僕は彼女の髪にキスをした。

「ううん、くすぐりたい」

そう言つて彼女は身体を揺り動かした。

僕はそんなつもりじゃなかつたことを、素直に口にした。

「ごめん」

彼女はその言葉に反応して、更に僕に身体を預けてきた。

僕は後ろからそつと彼女の方を抱き締めた。

彼女は抱き締めた僕の手にも、自分の手を添えた。

僕は彼女の耳元に口を近付けた。

そしてこう言つた。

「愛してるよ」

すると彼女は大きく二回頷いた。

それから彼女は、恥ずかしそうに口ごもりながら言つた。

「私も」

見つめ合う僕と彼女の間を、一抹の涼しい風が吹き抜けた。

シャンプー（後書き）

オムニバスで綴った『恋愛の風景』は、これで完結です。
作品全体の感想などがありましたら、是非お聞かせくださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9385m/>

Scenery of Love

2010年10月8日13時38分発行